九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

短編物語の発掘 ： 『風葉和歌集』二首入集散逸物語の再検討（一）

辛島, 正雄
九州大学教授

https://doi.org/10.15017/19777

出版情報：語文研究. 108/109, pp.27-40, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

短編物語の発掘

――『風葉和歌集』二首入集散逸物語の再検討（一）――

辛島正雄

さきに筆者は、「平安物語から中世物語へ――短編物語の位相――」（秋山虔編『平安文学史論考』［二〇〇九年、武蔵野書院］所収）と題して、物語史上に短編物語はどのように位置づけられるかを考えるため、『堤中納言物語』所収のかたちでしか現存しない短編物語以外に、かつてはどのような作品が存在したかについて、『風葉和歌集』入集歌が一首のみの散逸物語、という限定のもと、いささかの考察を試みた。また、そこでは紙幅の制約により言及できなかったものをも含めて、別稿「『風葉和歌集』一首入集散逸物語一覧――平安物語から中世物語へ・補遺――」（「文学研究」107輯、二〇一〇年三月）を用意した。その結果、リスト・アップされた物語は五〇にのぼり、そのうちの四二作品が短編らしい、との暫定的な結論を得たのであった。本稿では、そこでの限定を、二首入集の散逸物語（四一作品を数える）ということに緩めて、あらためて検討を加えてみたい。

ここでも紙幅の都合により、まずは、二首が別々にではなく、まとまって入集しているということで、七作品を取り上げてみることにする（見出しに付した通し番号は、全四一作品を歴史的仮名遣いによる五十音順に並べたさいの番号である）。

前稿に述べたように、『風葉和歌集』に二首入集した現存物語には、『苔の衣』『雫ににごる』『むぐらの宿』の三作品があるのだが、いずれも短編とはいいがたい。そして、それらの二首は、それぞれに異なる場面からの採歌である。そこで、二首入集とはいえ、二首が連続している場合に限っては、物語中のひとつの場面のみから採歌したということであり、一首のみ入集の散逸物語の扱いとほぼ同じと見なすことがで

きる（前稿ならびに別稿で検討したなかにも、詞書に歌の一部を含むので、じつは二首入集と変わらない事例として、[15]『心やり』[29]『鳥のねうらむる』[34]『花ざかり』[47]『よつあし』の四作品があった。しかし、いずれについても、長編的な構想は見出せないということで、短編と判断した）。そこに、短編である可能性を賭けてみたいのである。なお、散逸物語を網羅的に検討した先行研究については前稿（別稿にも）に掲げておいたので、ここでは省略した。参照されたい。

【3】『あしのやへぶき』

（題不レ知ラ）　葦の八重葺の按察大納言女

引かでだにやみなましかばあやめ草袖にうきねはかからざらまし

家の少将

流れてと例に引けるあやめ草君が夜殿はいつかかれせむ

（巻三・夏・一六六～一六七番。以下、『風葉和歌集』の引用は「岩波文庫」本による）

この物語については、小木喬氏の検討（『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』［一九七三年、笠間書院］）にほぼ尽きている。ただし、題号「あしのやへぶき」の由来について、和泉式部の歌、

つのくにのこやとも人をいふべきにひまこそなけれあしのやへぶき（『後拾遺和歌集』巻十二・恋二・六九一番、『和泉式部集』六九〇番。以下、歌集の引用は『新編国歌大観』による）

にしか見えない表現だとするのは、『古今和歌六帖』にすでに、

つの国のあしのやへぶきひまをなみこひしき人にあはぬ比かな（第二・田舎・くに・一二五八番）

の歌が見え、和泉式部詠もこの歌によったものであることから、訂正を要する。しかし、和泉式部の歌は、『俊頼髄脳』において、「こやとも人を といひて、ひまこそなけれ といへる詞は、凡夫の思ひよるべきにあらず。いみじき事なり」（「日本古典文学全集」本二六四頁）と、藤原公任によって絶賛されたという逸話が見えるほか、『和歌初学抄』や『古来風体抄』等にも採られ有名であったこと、『相模集』の「ひまなくぞなにはのこともなげかるるこやつのくにのあしのやへぶき」（五七三番）のように、和泉式部詠の影響を受けたとおぼしき歌が散見することから、題号の出所としては、やはりもっとも有力だといえよう。

小木氏の結論部分を引用すると、

忙しい夫を持った女が、その訪問の少ないのを嘆いていたが、「あしのやへぶき」の歌を贈ることによって、夫の愛情を深めることができた、という話が、この物語の

中にあったということが、ほぼ推定されたのである。しかし、こういうことは、当時の夫婦関係では、ごく当たりまえの話で、ことさら作り物語として、他人に物語るだけの価値はない話である。せいぜい「大和物語」の一段となる程度の話である。したがって、物語としては、これ以外に、物語るに足るような話を持っていたことを想像させる。しかし、残念ながら現存の資料では、それがどういう風のものであったかを推定することはできない。（一一九～一二〇頁）

とある。たしかに、男の愛情を恢復する女の話というだけでは、「せいぜい「大和物語」の一段となる程度」ともいえようが、歌物語でお馴染みの〈二人妻型歌徳説話〉に作り物語らしいディテールを施し、ひと捻りを加えた『はいずみ』のような作品も現に存在するので、「これ以外に、物語るに足るような話を持っていた」と、複雑な物語展開をことさらに想定せずとも、このままで短編物語としても成立しうるように思われる。

【15】『かほよきまひひめ』

五節の舞姫の、すぐれて見えけるに遣はしける
顔よき舞姫の蔵人少将
いかにせんをとめの姿恋しくは天つ空をやいとど眺めむ
返し　とばりあげの君
天つ空をとめの姿眺むとも雲の袂はまた見えんかも
（巻十五・恋五・一一四六～一一四七番）

「五節の舞姫の、すぐれて見えける」というのが、題号ともなった「顔よき舞姫」本人であり、かの女の美しさに魅惑された蔵人少将が求愛の歌をよこして来たのに対して、本人はやんわりと拒否した、というものである。ここからは、「少女」巻において、元服したばかりの夕霧が、舞姫となった惟光の娘を見初める話が、ただちに思い合わされる。「少女」巻では、そのおりの舞姫四人について、帝の意向により、「みなとどめさせたまひて、宮仕すべく、仰せ言ことなる年なれば、むすめをおのおの奉」（③五九頁。以下、『源氏物語』の引用は「新編日本古典文学全集」本による）ることとなったが、実際に、「例の舞姫どもよりはみなすこしおとなびつつ、げに心ことなる年」（六三頁）であったとする。父である惟光は、娘を「典侍あきたるに」（六四頁）就けたいとの希望をもっていたわけであるが、六年後、「藤末葉」巻に登場したとき、娘はすでに「藤典侍」（③四四七頁）と呼ばれていて、女官としての公務を立派に果たしている。

光源氏が舞姫として差し出した惟光の娘の姿については、

次のように描かれている。

五節の参る儀式は、いづれともなく心々に二なくしたまへるを、舞姫の容貌、大殿（＝光源氏）と大納言殿とはすぐれたりとめでののしる。げにいとをかしげなれど、ここしううつくしげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。ものきよげにいまめきて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などのありがたうをかしげなるを、かうほめらるるなめり。（③六二～六三頁）

そのように衆人の視線を浴びる舞姫の中でも、とくに可憐な惟光の娘に対して、夕霧は、

冠者の君（＝夕霧）も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひ歩きたまへど、あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつましきほどの心には嘆かしうてやみぬ。容貌はしもいと心につきて、つらき人（＝雲居雁）の慰めにも、見るわざしてんやと思ふ。（六三～六四頁）

と強く心を惹かれ、童殿上している娘の弟を語らって、

顔のいとよかりしかば、すずろにこそ恋しけれ。ましが常に見るらむもうらやましきを、また見せてんや。（六五頁）

と訴え、次のような恋文を託してもいる。

日かげにもしるかりけめやをとめごが天の羽袖にかけし心は（六五頁）

そのことを知った惟光は、

この君達（＝夕霧）の、すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕よりは、奉りてまし。殿（＝光源氏）の御心おきてを見るに、見そめたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし。（六六頁）

と、夕霧からの求愛と分かって大歓迎の様子であるのだが、実際には、予定どおり宮仕えに出て、夕霧とは、「うちとけずあはれをかはしたまふ御仲」（「藤末葉」巻③四四七頁）となるのであった。

こうして見較べると、やはり、『源氏物語』の影響下になった物語であるとの印象は、拭いがたいものがある。求愛する男は蔵人少将であるから、十二歳であった夕霧ほどの若輩とは思えないが、若公達には違いあるまい。その官職で物語は終わるのだから、おそらくは短編であり、『源氏物語』の二番煎じになるのを避けようとすれば、五節の舞姫の儀式そのものには筆を及ぼさなかった「少女」巻とは趣を変え、舞姫たちの姿を華麗に描くとともに、そのなかのひとりの美貌の舞姫を見初め、かの女に求愛する蔵人少将の片恋を印象的に

描いたものであったか。舞姫は、そのまま宮中にとどまり、典侍か掌侍となり、褰帳にも奉仕するようになったのであろう。しかし、詠者表記が「典侍」や「内侍」といった女官名ではなく、「とばりあげの君」という特異な呼称になっているのには、しかるべき理由がありそうだが、よく分からない。『古事談』第一に、花山天皇即位のおり、褰帳の命婦となった馬内侍を帝が高御座のなかに引き入れ交合した、との逸話が見え（「新日本古典文学大系」本二九頁）、『江談抄』第一にも同様の話が載り有名であったようだが、いかにも作り物語の世界にはそぐわない内容である。

ふたりがその後、夕霧の場合のように忍び逢う仲となったかどうかも不明だが、いったん拒否した女が翻意するという展開は、短編物語としてはやや想像しにくいであろう。

【18】

『式部卿宮』

中納言、女を抱きて出で入り侍りけるを見て、内に参り合ひ侍りて、畳紙に、男の女を抱きて妻戸に入る形を描きて見せ侍るとて

式部卿の宮の四位少将

身に添ひて二人有明の月の影入る天の戸を見きと知らずや

返し

月影は入る天の戸もなかりしを空目をたれか見たるなるらん

（巻十七・雑二・一二九〇～一二九一番）

四位少将の歌の第一句「身に添ひて」は、「岩波文庫」本では「身を寄りそうようにして二人が妻戸に入るのを」と訳されているが、それでよいのだろうか。「身に添ふ」は、和歌にも頻用される表現であるが、通常、なにかが身体に取り付いて離れないことをいうのであって、男女が寄り添った状態を表すのだとすれば、異例であろう。ここは、「身に添ひて二人……」と続くのではなく、第五句「見きと知らずや」にかかってゆくのではあるまいか。では、なにが誰の身から離れないのかといえば、四位少将が中納言の身から、ということになる。四位少将は、中納言の行動を監視し、そのあとを尾けまわしていた、というのである。なぜそのような行動をとるのか、理由は定かでないが、「末摘花」巻で頭中将が光源氏の行動を追跡しているごとくに、〈ふたりづれ〉の片割れが、色男の鼻を明かしてやろうと、じっとその機会を狙っていた、というのであろう。ちなみに、『今とりかへばや』では、今大将の身辺を嗅ぎまわる宮の中納言を、「身に添ふ影」（四四四頁・四七八頁。以下、『今とりかへばや』の引用は「新編日本古典文学全集」本による）と表現している。

してみると、ここでも『源氏物語』の影が落ちていること

になる。四位少将と中納言との「月（の）影」をめぐる応酬には、状況こそ違うが、「末摘花」巻の、

（頭中将）もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月

（光源氏）里分かぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる（①二七二頁）

というやりとりを彷彿させるものがある。「末摘花」巻では光源氏の忍び逢いの現場を押さえることのできなかった頭中将も、つづく「紅葉賀」巻においては、光源氏と源典侍との関係を察知し、「この君の、いたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうちうち忍びたまふ方々多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地いとうれし」（①三四一頁）として、光源氏と源典侍が寝入った頃あいを見はからって、部屋に踏み込み、大立ち廻りを演ずる。こうした〈ふたりづれ〉の趣向を活かした、短編物語だったのであろう。

四位少将が、「畳紙に、男の女を抱きて妻戸に入る形を描きて見せ」たとあるのは、「浮舟」巻で、匂宮が、「いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したる絵を描」いて、「常にかくてあらばや」（⑥一三二～一三三頁）といいながら、浮舟に見せる場面を想い起こさせるが、状況が似ているわけではない。

なお、題号「式部卿宮」については、これを疑問視する立場もあり、また、その由来も判然としない。

【21】『たなばたのつたへ』

筑紫にて見慣れける女に、上るとてよめる　七夕の伝への大宰大弐

重ねけんことぞ悔しき唐衣袖のみぬるるつまとなりけり

返し　山の僧正の母

唐衣たち離れなば我のみぞうらむる袖ぞ朽ち果てぬべき

（巻八・離別・五三九～五四〇番）

在任中に筑紫の女と親しくなったものの、都へと伴うことはせず、別れを惜しむ大宰大弐に対して、自分を置いて帰京する男を恨む筑紫の女、という構図である。女は、物語の最後に「山の僧正」となる子を産んでいるのであるが、子の誕生はいつの時点でのことであろうか。女の歌には、どこかしら、「末摘花」巻での末摘花の歌、

からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ（①二九九頁）

の面影がある。すると、男の歌にも、

なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれ

けむ（三〇〇頁）

という、光源氏の歌の気分が漂うようだ。そんな目で見直すと、男は女との別れを惜しんでいるように見せかけながら、じつは「重ねけんことぞ悔しき」こそが、本心だったのではないか。だから、都へと女を誘うこともしないのであろう。女の歌にも、その後の上京が予定されている様子はない。

いったい、ここで男女が交わす惜別のやりとりには、例えば「明石」巻での、光源氏の帰京を前にしての、明石の君との贈答のようなこまやかな交情が、感じられない。大宰大弐といえば、筑紫の地にあっては最高の実力者ということになり、物語にもしばしば登場するのであるが、多くは親としての役回りに終始していて、ここでのように恋の当事者となるのは、きわめて異例である。そのような男が鄙の地で、ふとしたことからひとりの女と情けを交わすようになった。しかし、『伊勢物語』一四段の陸奥国の女ではないが、任果てて都に戻る日がきても、「みやこのつとにいざ」（「日本古典文学全集」本一四六頁）とは誘いにくものがあった、というような事情でもあろうか。都から来た男と鄙の地の女との恋、といった話柄そのものは、「明石」巻の、「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ」（②二五三頁）との明石の君の思惟にも見られるように、めずらしいものではなかったようである。

男は、帰京後、女が男子を産んだことを知らされ、さすがにわが子不憫さから、上京させて面倒を見てやったところ、意外な学才を発揮して、立派な僧侶となった、といった後日譚が記されていたものか。だとすれば、「山の僧正の母」という詠者表記ではあるが、物語そのものは、筑紫の女と大宰大弐との恋の顚末を描くことに主眼を置いた、短編であると目される。

題号「たなばたのつたへ」であるが、その意味するところが、はなはだ摑みにくい。「たなばた」の喩えは、「東屋」巻で、匂宮の麗姿を見た中将の君が、「この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」（⑥四三頁）との感想を抱いているように、稀な逢瀬でもかまわない、といった文脈で使われることが多い（「総角」巻にも「げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ」［⑤二九三頁］とあるほか、『更級日記』での「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」［「角川ソフィ

ア文庫」本五五頁）との夢想も、同様の思いである）。しかし、この物語の場合、男はとくに貴公子というわけでもなく、大宰大弐にすぎないので、いくら舞台が筑紫であるとはいえ、「七夕ばかりにても」と願う相手としては、いかにも花がない。それでも、筑紫の女にとっては、さきの『伊勢物語』一四段の女ではないが、「京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける」（一四六頁）ということで、「たなばた」に託した思いを男に伝えてきた。男も、「さすがにあはれとや思ひけむ」（一四六頁）ということか、女を訪ねては逢瀬を重ねることとなったが、心から惹かれるような女ではなかった。――といった内容を想像することはできるが、ほとんど妄想の域に入ってしまったようである。これ以上の詮索は、打ち切りとしたい。

なお、詠者を僧侶の母とする物語に、一首のみ入集の［7］『**石山**』があり、前稿において簡単に検討を加えたが、そこでも、子が僧侶として出世することについては、エピローグに駆け足で記されているだけで、物語の中心は、あくまで母と男（子の父）とのままならぬ仲を描くことにあったもの、と推測した。

【30】

『ふせご』

夏の初めつ方、夜更けて、中宮の台盤所に立ち寄りたりけるに、女房の声どもしければよめる　　ふせごの頭中将

寝覚めする人もあらなむほととぎす忍びかねたること語らはむ

返し　　侍従内侍

忍び音はさてこそあらめほととぎすなべての空にいかが語らむ　　（巻三・夏・一四〇～一四一番）

『風葉和歌集』入集歌が一首や二首と少ない作品は、ほかに別出資料を見出せないのがほとんどであるが、この『ふせご』に関しては、『狭衣物語』中に「ふせごの少将」の呼称で二度（巻一・巻三）にわたって言及がなされていることが、黒川春村『古物語類字鈔』での指摘以来、知られている。当該箇所は、次のごとくである。

・「夜もやうやう明けやしぬらむ」と思ふまで、起き出づべき心地もしたまはねど、若宮の寝おびれたまひて俄に泣きたまふに、人々も起くる気配して、「風の荒きに、御殿油も消えにけり。紙燭持て参れ」など言ふなるにも、ただかうて、伏籠の少将のやうになりなまほしけれど、かひなきものから、「隠れゐて、（女二の宮は）いかに侘し、

いみじとおぼすらむ」と推し量るも、「今はさらに。ただ、いかにも（女二の宮の）御心に違はぬをだに人知れぬ心ざしには」と、せちに思ひおこして立ち出でたまふに、……（巻二㊤一九八頁。以下、『狭衣物語』の引用は「新潮日本古典集成」本による）

・戸のやをらあく音して、さと匂ひ入りたる追風も紛るべうもあらぬに、ただなにとも思ひあへず見やりたまへれば、冠の影ふと見ゆるに、（女二の宮は）ものもおぼえさせたまはず、仏の障子口に入りて引きたてさせたまひぬるも、手のみわななかれて、とみにぞたてられぬ。かのありし寝覚の床に濡らし添へたまひし濡衣おぼし出でられて、「今宵さへさだにあらば、やがてかくながら伏籠の少将のやうにもなりなむ」と、心惑ひも世の常ならぬに、御衣の裾も残りなう引き入れさせたまひてける（女二の宮の）御心の疾さも、限りなくうらめしうかなしきに、この障子も引き破りつべうおぼゆれど、胸のみ騒ぎてとみにぞ動かれぬ。（巻三㊦一六〇頁）

散逸物語研究の先駆的業績である松尾聰著『平安時代物語の研究』（一九六三年改訂増補版、武蔵野書院）所収「ふせごの少将の物語」では、『狭衣物語』での言及箇所も検討したうえで、「ふせごの少将は、女の許に忍び入つたが、女は衣をぬいで逃げてしまふ、少将はその衣をひつかぶつて、丁度伏せ籠に衣をかぶせたやうな形のまゝで、危く焦れ死に息絶えようとした。」（七八頁）といった筋を復原し、「この物語は主人公の活躍時代の官が少将であり、それが頭中将に至つただけで終つてゐるのであるから、長篇物語ではない。短篇又は中篇の作品であらう。」（七八頁）とし、また、「この物語は少将といふすき者の若い貴族の忍び歩きの逸話（それも内面的心理的なものでない、外面的行動的な）を中心とした物語といつた風のものであつたのであらう。」（七九頁）と考えている。これを承けて、小木氏は、『狭衣物語』巻二での言及のありかたから、「少将は、夜が明けて人々が起きてきても、そのままの形でいたということにな」り、「明るくなっても、振った女の衣をかぶって伏せ籠のような格好でいた」ため、「人々から笑いものにされて「伏せ籠の少将」とあだなされた」と理解し、「この少将は「をこの色好み」ともいうべきもの、「平中物語」ではなく、「今昔」や「宇治拾遺」に見えている墨塗りの平中の類で、そういう戯画化された好色談の主人公と思われる」（圏点ママ。前掲書七四八頁）と見ている。あるいは、別稿で検討を加えた[31]『**ぬりごめ**』などとも似た方向性の作品であったか。

なお、『狭衣物語』巻二の場面は、師走の月の夜、女二の

宮を思い、故皇太后宮邸を訪れたさいのものであるが、そのおり狭衣は、「池に立ち居る鴛鴦の音なひも、同じ心に」思われて、「我ばかり思ひしもせじ冬の夜につがはぬ鴛鴦の浮寝なりとも」と歌を口ずさむものの、「聞く人なければ、口惜しさに、「もし寝覚めしたる人やある」と、試みに近う寄りて聞きたまへど、音する人なくて」（㊤一九五頁）という状況から、女二の宮の寝所へと忍び入ることとなる。これは、『風葉和歌集』の詞書「夏の初めつ方、夜更けて、中宮の台盤所に立ち寄りたりけるに、女房の声どもしければよめる」と見較べると、季節は初夏に対して厳冬の十二月、立ち寄った場所に人声がするかしないかで、一見すると正反対のようであるが、歌においては「ほととぎす」と「鴛鴦」と、いずれも鳥が詠み込まれていて、「寝覚めする人もあらなむ」には「もし寝覚めしたる人やある」が重なってくるなど、先行する『ふせご』の内容・表現を念頭に置いて、意識的にずらして描こうとした節も見受けられるように思われる。

【31】

『ふたご』

冷泉院に行幸ありける時、ともに中将にて青海波舞ひて、同じく正三位許されて侍りけるに、殿の中将進みて、中納言になりにければいひ遣はしける

二子の宮の中納言

もろともに登りしものを位山などこのたびは誘はざりけん

返し、中納言に代りて　　関白

もろともに立ち登るべき位山まづ先立ちて道しるべせむ

（巻十八・雑三・一三三四～一三三五番）

一見して、『源氏物語』の「紅葉賀」巻が思い合わされる内容である。「紅葉賀」巻では、朱雀院の行幸の試楽に、「源氏の中将」が青海波を舞い、その相手方が「大殿の頭中将」であったのだが、「立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり」（①三一一頁）と、あくまで主役は光源氏であり、頭中将は引き立て役にすぎない。本番では、さらに、「青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見」え、「今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒くこの世のこととともおぼえ」（三一四～三一五頁）ぬ光源氏の妙技であった。その夜に、舞の賞として、「源氏の中将正三位したまふ。頭中将正下の加階したまふ」（三一五頁）と、ふたり揃っての昇叙が記されるものの、ここでも頭中将は、光源氏への絶賛に便乗したかたちである。こうした『源氏物語』での、いわゆる〈ふたりづれ〉の趣向を、ことさら両者同等としたところに、この物語の作意が感じられる。題号「ふたご」も、そのことと無関係ではありえまい。

殿の中将と宮の中将が並び立ち、かつ競いあうということでは、『我身にたどる姫君』の巻四以降の展開も想い起こされるが、そちらは長編としての構想に奉仕すべく設定されたものである。この物語では、当代の貴公子の双璧として甲乙つけがたい「殿の中将」と「宮の中将」が、まるで「ふたご」のように相並んで青海波を披露し、舞の妙技に対する褒美として、同時に正三位への加階を果たしながら、いかなる理由によるものか、中納言昇進に当たっては、差がついてしまったというのである。「殿」のほうが先行するのは、『我身にたどる姫君』の場合も同様である。ちなみに、まぎらわしい呼称のふたりが登場するということでは、少将と権少将が故大納言のふたりの姫君とかかわる『思はぬ方にとまりする少将』や、春の中将と秋の中将とが相並び登場する『石清水物語』などの例もある。

「紅葉賀」巻では、光源氏と頭中将が、源典侍をめぐって恋の鞘当を演ずることになるが、そうした、色恋の道でもふたりが張りあう関係にあったかどうかは、不詳。殿の中納言に代わって父の関白が、宮の中将を慰める歌を贈っていることからも、ふたりの中将は無二の親友であり、そのことは誰もが承知することであったようである。物語は、宮の中将も昇進して、ともに中納言となり、「ふたご」というにふさわしい状況を恢復したところで幕となっているらしいから、短編と見て過つまい。『源氏物語』の一部を抽出し、その変奏を試みた物語なのであろう。

なお、贈答歌がいずれも「もろともに」で始まっているのだが、ここには、「末摘花」巻で、光源氏の忍び歩きを尾行してきた頭中将が、

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月（【18】『式部卿宮』の項に既出）

と詠みかけたことが、意識されているのではあるまいか。『源氏物語』では、光源氏と「もろともに」歩もうとしても、けっきょくは後塵を拝するほかない頭中将であったが、そのような〈ふたりづれ〉の物語を、まさしく「もろともに」足並みを揃えて人生行路を歩もうとする、仲うるわしいふたりの貴公子の物語へと変換して見せたのが、『ふたご』の物語だったのではあるまいか。

【34】『もとのしづく』

あはれ知られぬべき夕暮に、荒れたるところに住むべき女のもとに遣はしける　　本の雫の大将

ながむらん浅茅が原の虫の音を物思ふ人の心とを知れ

返し　　おほきおほいまうち君のむすめ

置く露のしげき浅茅に鳴く虫はなべての秋のさがとこそ聞け

（巻五・秋下・二九五～二九六番）

題号は、直接には作中の歌から出たとも考えられるが、そうだとしても、僧正遍昭の、

すゑのつゆもとのしづくやよのなかのおくれさきだつためしなるらん（『遍昭集』一五番。別出、『古今和歌六帖』第一・天・つゆ・五九三番、『和漢朗詠集』巻下・雑・無常・七九八番、『新古今和歌集』巻八・哀傷・七五七番）

によるものとする従来の指摘は、正鵠を射たものと思われる。この歌は、さまざまな物語中に引歌や本歌として頻用され、つとに周知のものであった。ただし、「もとのしづく」のかたちで引かれるのは『狭衣物語』からであり、『源氏物語』では、もっぱら「おくれさきだつ」という表現の典拠とされている（なお、『栄花物語』巻十六が「もとのしづく」と題されているが、その巻名も、「御涙のつぐづくと漏り出づるほども、「本の雫や」と、あはれにおろかならず」［『新編日本古典文学全集』本②二〇六頁］と引かれた遍昭の歌に由来する）。伊井春樹編『源氏物語引歌索引』（一九七七年、笠間書院）によれば、作中の初例は「葵」巻の「後れ先立つほどの定めなさは世の性と見たまへ知りながら」（②六三頁）であり、以下、「柏木」「御法」「椎本」「宿木」各巻に見える。『狭衣物語』では、いずれも巻三に、

・かく嘆く嘆くも、はかなき世のもとの雫のほどはおのづから過ぎなむ。（㊦七八頁）

・もとの雫はいつとても同じ事なれば、……（㊦一七〇頁）

と見え、「もとのしづく」は老少不定をいう慣用句のごとくである。鎌倉期に成立した『苔の衣』冬の巻にも、

後るとももとの雫の例にて夜半の月をもいかが見るべき（『中世王朝物語全集』本二五九頁）

のように「もとのしづく」を詠み込んだ歌が見えるが、同じ物語の秋の巻には、

・限りあらん道も後れ先立たんことはなほ心憂し。（一五〇頁。これは、「桐壺」巻の「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを」［①二二頁］を写した表現であるが、『源氏物語』では古注以来、とくに遍昭の歌との関連が指摘されたことはない）

・はかなき世の有様は後れ先立つ習ひにてのみ候へば、つゆ思し嘆かせ給ふな。（一八四頁）

ともあり、この物語以外にも、「おくれさきだつ」という表現を取る例は少なくない。『今とりかへばや』巻二には、

誰も千歳の松ならねど、後れ先だつ末の露のほどこそあはれなるべけれ。（二六九頁）

のごとく、「すゑのつゆ」とともに「おくれさきだつ」が用

いられている。

大将と太政大臣の娘との贈答は、誰しも秋の情趣が身に染みて感じられそうなある夕暮、男が、浅茅が宿でもの思いがちに過ごしているであろう女のもとに、あなたが聞いているその虫の悲しげな鳴き声は、もの思いするわたしの泣きたいような気持そのままだと分かってほしい、と訴える。すると、女は、悲しみ深いこの浅茅が宿では、秋になれば虫はその習性としてただ鳴いているだけのこと、特別な意味などありませんと、虫に託して秋のしみじみとした情感を分かちあいたいとする男に、共感するところはないと、そっけない態度をとったものである（なお、詞書に「荒れたるところに住むべき女のもとに」とある「べき」の文字はやや不審。中野荘次・藤井隆著『増訂校本風葉和歌集』［一九六九年、友山文庫］によれば、底本の丹鶴叢書本は「すむ女のもとに」であり、京・図・竜・神・嘉の五本に「へき」の文字があり、狩のみ「すみける女のもとに」とある由である。校合本の略号については、該書の「凡例」を参照されたい）。

男女のやりとりにおいて、女が冷淡に応ずるのは、いわば約束事であるから、大将と太政大臣の娘との間にも、男女の関係があったものとして、不都合はない。しかし、『源氏物語』の薫と大君との間柄のような場合もあるので、その判断は微妙になる。ほかに気になる点として、太政大臣にまで昇った人の娘が、なぜ荒廃した浅茅が宿に住まう必要があったのか、ということがある。父の死後、零落した、ということであろうか。

題号「もとのしづく」からは、物語中で誰かが亡くなり、老少不定、無常の世であることを痛感する、といった場面などがあったものと想像される。それが、太政大臣の死を指すとすれば、順番どおりの〈さらぬ別れ〉ということで、関係者が悲しむのは当然としても、ことさら老少不定を思い知らされるというには当たらない。あるいは、さらに娘までもが死ぬということで、大将が無常を観ずることになるものか。そうすると、ますます薫と大君との関係と似てくることになる。「宿木」巻では、大君の歿後、久しぶりに宇治を訪れた薫が、弁の尼と対面して、

言ひても言ひても、むなしき空にのぼりぬる煙のみこそ、誰ものがれぬことながら、後れ先だつほどは、なほいと言ふかひなかりけり。（⑤四五五頁）

と語っている。また、薫は大君に対して、色恋とはかかわりなく共感しあいたいとして、次のように述べてもいた。

世の常のすきずきしき筋には思しめし放つべくや。さやうの方は、わざとすすむる人はべりともなびくべうもあらぬ心強さになん。おのづから聞こしめしあはするやう

もはべりなん。つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ、また、かく世離れてながめさせたまふらん（大君の）御心の紛らはしには、さしもおどろかせたまふばかり聞こえ馴れはべらば、いかに思ふさまにはべらむ。（「橋姫」巻⑤一四二～一四三頁）

薫のことばとは裏腹に、かれの大君への恋情は募るばかりあったが、男女の一線を越えるには到らなかった。『もとのしづく』の大将も、いわゆる〈薫型〉の人物であったか。

以上、『風葉和歌集』に二首歌が採られた物語のうち、その二首が連続して入集している七作品について検討してきたが、長編であることを窺わせるものは、皆無であった。残る三五作品についても、逐次検討してゆきたい。（二〇一〇年三月稿）

（からしま　まさお・本学教授）